
異説、ドイツ栄光の階段

橘花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異説、ドイツ栄光の階段

【Zコード】

Z3528V

【作者名】

橘花

【あらすじ】

フンボルト大学ベルリンを卒業した一人の青年は、ドイツの今の現状が正しいのかを疑問に思つ。そんな時、見ず知らずの声に導かれ、彼が行つた世界は。

史実からかなりかけ離れる事や、現実的にありえない事など多数あります。

プロローグ（前書き）

正直、太平洋戦線でのネタが尽きて、今度は歐州に手を出しました。
あらすじに書いた通り、現実的にありえない事があります。主人公
の副官が○ル○だつたり。

プロローグ

フンボルト大学ベルリン

「諸君、君の栄光は、ドイツ国家の歴史に永久に刻まれることとなるでしょう。」

学長が挨拶を行い、卒業式が終わる。

「なあ、ヒーベルト。お前は卒業したら何になりたいんだつけ?」

「まあ、歴史学者でも田舎者かよ。」

フリードリヒ・ヒーベルトは、自ら立ち上げた戦史研究会の部室を掃除しながら呟つ。

「やうやく。お前って第一哲学部だったもんな。それに、入学早々の歴史の授業で先生を諷刺したって話、今でも有名だぞ。」

「やめてくれよ。あん時はクラス中に注目されて恥ずかしかったんだから。」

「俺らがって驚いたよ。」

「ほほほ、まあこれで俺らは卒業だな。」

「ああ。元気でやれよ。」

そう言つて戦史研究会の友人と握手を交わし、部屋を出た。

自宅

エーベルトの自宅は周りが緑に囲まれた自然豊か、悪く言えば田舎からベルリンにある大学まで通っていた。ベルリン市内に部屋を貸りるよう親が進めたが、自然を見ながら大学に行きたいと言つて聞かず、結局在学中毎日自宅から通つた。

「卒業おめでとうフリードリヒ。」

親は息子の卒業を心底喜んだ。家庭的な事情で両親共に大学卒業はしておらず、田舎の小さな工場で製品の設計に務め、母は農業を営んでいる。

「ありがとうございます。大学へ通うお金を出してくれて。」

田舎で、貧しいって程ではないが、それでも経済的に苦しく、大学へ通えないので心配していたが、無事に大学を卒業することが出来てフリードリヒは感謝している。

「何を言つて居る。父さんたちが行けなかつた大学だ。それを息子が大学を卒業してくれてありがたいぞ。」

「ふう。」

帰つてくるなり、戦史研究会を立ち上げた時から続いている恒例の

兵器設計を始める。父が製品の設計を昔からしており、その設計図を見て育つたフリードリヒにとって、趣味の兵器調べが行き過ぎて兵器設計になってしまっていた。

「何なんもんでいいかね？」

設計中の?号戦車、タイガー戦車で有名な戦車をモ^デルに改良を加えて設計した新?号戦車と名付けた。それが、書き終える。

『なかなかいい出来前ねえ。』

突然、自分しかいない筈の部屋から声が聞こえてきた。

「誰だ！？」

しかし、返事は無く。

『それが実際に暴れたら、ドイツはまじめになつたんだろうね？』

「誰だか知らないが、もうドイツは戦争へは関わらない。」

『IJの国が戦争をしていた時期。それも、戦車がまだ黎明期の第一次世界大戦では・・・実用化は無理ね。でも、その時から技術開拓をしていれば？あるいは。』

「誰だか知らないが、過去に戻せるとでもいうのか？」

『ええ。貴方が活躍できるよう、色々と歴史に細工をしてあげます。行ってみてください。あなたの考えた兵器が、何処まで通用するか？』

「なー?」

目の前が真っ白になり、続いて物凄い衝撃が走る。そして、気を失つた。

欧洲大戦（俗言の第一次世界大戦）終結間際のドイツ・

「ハ、ハハ?」

自分が居るのは戦場のど真ん中。砲撃が次々と飛んでくる。

「おい、何をしているんです!…早くハサハサ。」

と、突然大声で呼ばれ、フリードリヒは急いで呼んだ者が隠れている塹壕へ入った。

「戦場のど真ん中で止まっているとは度胸がありますね。」

「君は?」

「自分でですか?自分はアドルフ・ヒトラー伍長であります。」

それに驚いた。ヒトラー、ドイツ人にとってこれ以上の複雑な人物は居ないだろ?。20世紀の悪魔とも今では言われている程だ。

「アドルフ伍長?」

「 さういふ中尉殿は、何処の連隊の者で？」

答えに困っていたその時、鐘がなつた。

『マスター・ドガスだ！！、全員、防毒マスクをしろーー。』

それを聞き、急いでガスマスクを着け、そして思った。

(二)には第一次大戦の1918年、10月15日だ。)

実際、この日アドルフ・ヒトラーはマスター・ドガスに遭られ、視力を一時的に失っている。

案の定

「 おい、ヒトラー伍長。確りしろーー。おいーー。」

幾ら後世の独裁者とは言え、今は一の兵士に過ぎない。それに、傷ついているなら救うのが人間として当然だらう。

何とか抱ぎ上げ、おんぶの状態で野戦病院までヒトラーを運んだのだった。

闘争

野戦病院

「触らない方がいい。」

療養しているヒトラーは包帯を取り外とした所をフリードリヒが止める。

「医者が言つには失明する可能性がある。今はそつとしておけ。」

「ちゅ、中尉殿。戦場は？我がドイツ帝国は勝ち続けていますよね？」

ヒトラーはフリードリヒの両肩を掴んでくる。フリードリヒは迷つた。今日は事実上終戦の日。11月11日のだから。

「心配するな。もうじき、終結する。」

「じゃあ、我がドイツ帝国は勝利しますよね？」

これにも回答が迷つた。そこへ、医者が入ってきて。

「おい聞いてくれ。たつた今、軍上層部並びに中央政府は降伏することが決定したそうだ。」

「我々ドイツが負けたのか。」

治療を受けている他の軍人たちは皆、複雑な感情だった。終結を素

直に喜べない。それを聞き、ヒトラーは愕然とする。そして、

「ドイツが・・・負けた・・・だと?」

頭に巻いていた包帯を思いつきり握りしめ、引き千切る。

「お、おこなせー。失明するぞー。」

フリードリヒは止めようとするが

「200万の兵の死も・・・全て、全て無駄だったとでも言つのか!」
!」

「ちよ、君、やめなさい。」

「失明するぞ。」

他の兵隊や医者が止めようとすると、ヒトラーは構わずに田を掴む。

「祖国の不幸に比べれば・・・失明の苦悩など、取るに足らん!...」

その場に居る全員が騒然とする。フリードリヒはそれを見届け、野戦病院を後にした。

その後、ドイツはベルサイユ条約に調印。軍備は抑えられ、領土の一部と植民地全てを失い、戦争で破綻した経済に拍車がかかるよう、当時のドイツに払えるはずもない莫大な賠償金が課される。政府はそれを何とかするために金を刷り、それが原因で更に経済が混

乱。マルクは、紙切れ同然となつた。

ケルン郊外

「諸君らに集まつてもらつたのは他でもない。」

フリードリヒにはパリ講和会議の最中に軍を除隊。その後、軍人や兵器開発者などの専門の人を密かに集め、勉強会の名目で集会を開いた。

「マルクは紙切れ同然となり、ドイツは全てを失つた。このままでは、もう一度大きな戦争が起ころ。そうなれば、我がドイツは真っ先に敗北するだろつ。」

フリードリヒはそつ切り始める。ベルサイユ条約は軍人などでも多数の不満があり、軍艦なども多数が引き渡されれるのを拒否して自沈の道を歩んでいる。

「奴らは、我がドイツに莫大な量の賠償金を課し、ドイツを滅亡させようとしている。我々は、これを黙つて見過^いしていいものか? どうだ。」

フリードリヒは全員に問う。

「見過^いせない。」

「そうだ! そうだ!」

案の定の答えが返つてきた。

「そこ」で、アイゼハナ車両製作所は、これを生産してもらいたい。
但し、地下工場でな。」

既に、ドイツ地下には大量の地下兵器工場が極秘に作られており、
そこを何社かの組に分け、地下にて兵器増産を開始した。

「?号戦車? それにしては砲塔があつませんな。」

「あくまでも、訓練戦車です。」

「では、本命は?」

「これです。」

「?号戦車? 今度は機関砲とは。」

「そして、戦車の原型となる?れ。」

「?号戦車。やつと、主砲が搭載されましたか。」

「その他の各社にも、後程設計図を送ります。ある程度の生産が出来たら次のも送ります。」

その他にも航空機のエンジン等の設計図と航空機の設計図を各社に
送った。この後の歴史で、航空機メーカーを作る人や、戦車などの
兵器を生産することになる人们にも勉強会に参加してもらっている。

「ハインケルさんにはこれを。」

渡したのは h e 7 0 と h e 1 1 1 の設計図だった。

今回渡した全ての設計図は後知恵も盛り込まれている。戦車は後のソ連戦車並みに幅広で設置圧の低い履帯や傾斜装甲、高速移動にも適した大型の転輪。それに、部品数と工程を減らす工夫も航空機と戦車には盛り込まれている。

設定上、自分の家とされている自宅に帰り、ベッドに寝つ転がる。

「どうして、タイムスリップなんか。あの声は一体なんだったんだ？」

自分でも分からなかつた。何で突然タイムスリップをしたのかを。

「まあ、現実に意味を求めても無駄か。」

そう考え、眠つた。

次の日からは忙しかつた。地下工場で早速戦車生産や航空機生産が始まつてゐる。

「航空機は民間機、戦車は農業用トラクターの名前でそれぞれ生産しています。」

史実通りの名前だつた。生産時期は史実よりも大幅に早いが。

「外国から戦車や戦闘機を輸入して調べましたが、単発機でした

つけ?」この飛行機の性能は卓越しています。」

試作一号機が早くも完成したメッサーシュミットBF109は早速飛行試験を行っている。

「黙だ。追いつけない。」

D・?を軽々振り切るBF109はその性能の高さを示す。

「エンジン出力が計画値の示すにはもう少し掛かりますが、残存エンジンの300馬力を搭載してこの性能です。素晴らしい。」

時速は320?を記録している。最終的には690?まで速度を向上させたいため、まだまだエンジンが期待通りの性能を示していく。

「もう少し改良の余地がある。エンジンを早急に開発せないと、こんなスピードでは戦えない。」

「え? 在来機のどれを相手でも振り切れる機体ですよ。十分では?」

「いや、今度は恐らく航空機がどんどん発展していく。こんなスピードが通じるのは、今だけだ。」

「分かりました。エンジンの開発も全力を尽くせます。」

強計画

1924年 4月10日

「ゴルンベルク

「エーベルトさん、貴方の指示していたノルウェー北部に秘密ドックが建造されました。」

「そうか。」

エーベルトは地下工場だけでなく、秘密のドックも建造を指示している。15万t級ドック×2、6万t級ドック×3、4万t級ドック×5と言つドック数だった。

「そこに、これを建造指示させよ。」

「これは?」

「大型戦艦と大型空母。それに、中型空母だ。」

「しかし、スウェーデンの鉄鋼とアメリカの鉄鋼だけではかなりの年数が掛かりますが。」

「心配するな。スウェーデンにサルベージ船がある。それを使って、自沈した軍艦を引き上げ、還元して使えば良い。それに、もうじきアメリカからの鉄鋼を大量に輸入できるチャンスが来る。」

世界恐慌が起これば、アメリカの製鉄産業も衰退を始める。儲けた

い製鉄産業と政府は、買つてくれる相手ならバンバン輸出するため、そこを狙つて大量に輸入するのだ。

「それと、ミュンヘン方面で一一揆が起こり、国家社会主義ドイツ労働者党党員が逮捕された事件で、首謀者のヒトラーがランツベルク要塞刑務所に」

「労働者党が？」

「はい。」

正直、ヒトラーの独壇裁判を見たかったが、仕方がない。エーベルトは立ち上がり。

「車を用意しろ。ランツベルク要塞刑務所へ出せ。」

表に車が用意され、それに乗つてバイエルン州ランツベルク要塞刑務所に向かつた。

ランツベルク要塞刑務所

「久しぶりだなヒトラー伍長。」

「あ、貴方は。」

「エーベルト中尉だ。つと言つても、今は退役して、兵器産業省を立ち上げている。」

「そうですか。今、ドイツは衰退しきっている。政府は敵の為に紙幣を印刷し、近頃はパン一つに800万と言つ莫大な値段が付けられている。おまけに、街中では失業者が大勢いる始末だ。」

「ベス君は元気かね？」

「今は口述筆記中だ。」

「『嘘と臆病、愚か者に対する4年半』（後の『我が闘争』）ですか？」

「はい。何故、知っているんです？」

「そんな事より、その題名は長いと思いますよ。」

「では、どんな題名が良いかね？」

「そうですね、貴方の人生を闘争と置き換え、『我が闘争』なんてどうでしょつか？」

「『我が闘争か』。中々面白い題名だな。」

「では、私はまだやらねばならないことがあるので。そういう、裁判での演説、見事だったよ。」

自らを全ての責任者とし、弁解を行わず、国民の権利を守るために戦った罪で有罪と言つた。この演説に、判事までもヒトリーと共に感したほどだ。

「見に来ていたんですね？」

「ああ。」

そうつられて面会室を出て、外に待たせている車に乗った。

「アウンツァー君、勉強会本部へ。」

「はい。」

その後、世界は歴史通りに動いた。世界恐慌がアメリカで発生し、世界経済の中心を担っていたアメリカの経済は混乱。瞬く間に世界に波及した。ただ一つ、共産大国ソ連を除いて。

ヒトラーは再び政界へと復帰し、ナチス党勢力を拡大。ナチス党大会の最中、ニコルンベルク法を制定してユダヤ人が市民権などを剥奪。ベルサイユ条約を史実よりも早い1934年に破棄して再軍備を開始し、国防軍強化と空軍の存在をナチス党大会でアピールした。

「自己をあらゆる武器で守りうとしない制度は、事実上自己を放棄している。」

ヒトラーは空軍の存在や国防軍強化を表明した時に言った。

ニコルンベルク

「エーベルトさん。ヒトラー総統の使いと名乗る突撃隊が。」

「分かった。通したまえ。」

使いはエーベルトの部屋に入り、

「エーベルトさん。総統がお呼びです。我々ども同行願います。」

「一体、何の用かね？」

「1J同行を。」

ただ、突撃隊員はそれしか言わない。

「分かった。支度をするから、外で待つとけ。」

總統官邸

「私を呼び出して、何の用かね？」

總統官邸に連れて来られたエーベルトは執務室の椅子に座る。

「フリードリヒ君。君は、国防軍とは別に、兵器生産をしていたようだな。しかも、空軍を持つ前から、戦闘機や爆撃機、輸送機まで

生産している。」

「それが？」

「本来なら、国家反逆罪で逮捕されている。しかし、君には第一次大戦で命を救われている恩がある。その恩に免じ、生産した兵器を全て、こちらに提供する条件で君の罪は問わない。」

「總統、ならもう一つ条件がある。私を、国防軍大将に任命しろ。」

「貴様、總統に向かって。」

後ろに控えているヒムラーは言つてくるが、ヒトラーは手で制止をせら十分だろ？。」

「では、交渉成立だな。」

「して、どの位の兵器生産を？」

「全て、そちらの保有する兵器を越えてくる。質、数共に。」

ヘルトはキール軍港に總統やナチス高官らと共に向かった。

「そもそも總統が私を呼びに来るだろ？と思い、今日艦艇や兵器、航空機がここに集結することになります。貴方は、今まで見たことも無く、ドイツの偉大さを改めて実感することになるでしょう。」

「

暫くし、巨大な戦艦や空母などの海軍艦艇。並びに、空を埋め尽くさんばかりの航空機、地上を走る戦車などの装甲車両、軍用車両が到着する。

「す、素晴らしい。」

ヒトラーはまだ称賛する事しか出来なかつた。ドイツでは少數しか居ない水上艦艇もこれで強化されるし、空母があれば洋上での補給も出来る。

「IJの戦車は、我が軍の装備する履帯よりも広いではないか。」

戦車は全て履帯を広くし、その他の軍用車両でも一部は履帯を張つてゐる。バイクでも、履帯を装備している程だ。ソ連の整備されない土地に車輪では不向きだし、粘りつく泥やぬかるむ土で進行が大幅に遅くなるため、それを防ぐために履帯を装備している。

「さて、これで望みの兵器提供は済みました。後は、こちらの要求した国防軍大将に任命してください。」

「よからう。本日を持ち、フリードリヒ・ヘルベルトを、国防軍大将に任命する。」

「感謝します。總統。」

敬礼をし、国防軍大将階級付制服を着て、国防軍へと入隊した。

出番ないと開戦

入隊をしたエーベルトは部下となる兵士に挨拶を終え、自宅へと戻った。

「疲れたな、正直總統がこんなにあつたらと許可を出すとは。」

戦車や航空機など、預けた兵器で訓練を始めた兵士は、これまで乗ったことも無い兵器を見て驚いている。

「ん?」

脇道の林に、光が見える。

「何だらう。」

車を止め、ワルサ P38を抜いて奥に入つて行く。

「あれは?」

そこには、ドイツ国防軍の制服と帽子を被った女性が居た。

「何をやつしている?お前は、何者だ?」

「やめ!」

その女性はビッククリしてその場に倒れた。その拍子に、被っていた帽子が落ちてエーベルトは驚く。

「お、お前、エルフか？」

長く尖つた耳を持つ、エルフだった。

「馬鹿な、あれは神話の箒だ。」

「それでも、私は存在している。エーベルトさん。」

突然、そのエルフは立ち上がりてエーベルトの名を呼ぶ。

「何故、名前を？」

「あら、この声に聞き覚えは『なかなかいい出来ねえ』。」。

「…。お、前は、まさか。」

「そのまさかだよ。この世界に貴方を呼んだのは私。エルフは魔法を使えるって、習わなかつた？」

「魔法が存在すること自体知らないよ。」

エーベルトは少し後ずさる。しかし、そのエルフ女性はエーベルトが後ずさつた分だけ前に来る。

「心配しないで。私も、ドイツ国防軍所属で、しかも貴方の副官つてことにしたから。」

「何…？」

驚き、更に後ずさつた。しかし、またしても距離を詰めてくる。

「そもそも、その銃を下してくれない？銃口を向けられているのはいい気分じゃないから。」

「わ、分かった。」

エーベルトはゆっくりとワルサ を下し、ホルスターへ収める。

「どういう事だ？何故、この世界に呼び寄せた？」

「貴方は兵器を自室で設計していたからね。その貴方に来てもらつたの。知つてるでしょ？この後に起つる、世界大戦を。」

「ああ。」

「敗北し、ドイツの女性がソ連兵士に犯されたことも？」

「ああ。歴史で学んだ。」

「そう。私は、それが嫌で貴方にここへ来てもらつたの。戦争は回避できない。第一次世界大戦で、負けたあの時からこの大戦は回避不可能だつた。だから、少しでも良い終り方が出来る様、未来から優秀な人間を呼んだの。」

「そつか。」

「そして、私も勝手ながら貴方の副官つて事にしたの。私には、責任があるから。貴方が、どうやっていくのか、見届ける責任が。」

「分かった。事情も。あと、少ししたら開戦だ。」

1939年 9月1日 未明

總統官邸

「神は私にお告げになられた。全軍に布告せよ！…、ポーランド侵攻開始！…」

ポーランド国境線

「ヘルベルト大将。総司令部より、ポーランド侵攻を開始せよとの命令です。」

「分かった。」

そう言って自らの戦車、?号戦車レオパルトに乗り、

「国境ゲートを開けよ。総員、ワルシャワを陥落させるぞ。」

ドイツ戦車軍団を先頭に、ポーランド国境を各方面で突破。幾つかの国境線では抵抗を受けたが、戦争準備の整っていないポーランドに抵抗を持続させる力は無く、直ぐに突破を許した。

「後方は歩兵部隊に任せよ。戦車隊はただ敵中を突破し、ワルシャ

「つくと田指す。」

開始から順調なスタートを切った。ポーランド軍は各地で敗走し、首都を目指して撤退していく。

「前方に装甲車、撃て。」

レオパルドの127mm砲はWZ29装甲車を破壊し、更に突き進む。

「空軍のシコトウーカです。」

見ると、18機のシコトウーカが3個編隊で飛行しており、それは前方のヴィエルニを爆撃している。

「あそこには戦車部隊が居ます。」

見ると、ヴィエルニにFTPが居る。

「歩兵部隊は？」

「後方28?地点に居ます。」

「何故そんなに遅い?。」

「交戦中の模様です。」

「?、?号戦車は何をやっている!?。」

歩兵部隊には?、?号戦車を配備し、少數だが?号戦車お入ってい

る。しかし、それでも歩兵との勝負は十分の筈だった。

「それが、敵は塹壕に隠れて撃つているようにして、反撃が。」

「戦車を突っ込ませる。何のための戦車だ！！」

「は、そう命じます。」

その時、車体に衝撃が走り、揺れる。

「どうした？」

「左側面より砲撃。ヴィッカース6トン戦車です。」

「砲塔、左70°。ヴィッカーズ6トン戦車を狙え。」

砲塔が旋回を始め、ヴィッカーズ6トン戦車に狙いを定める。

「撃て……」

命中した砲弾は、ヴィッカーズ6トン戦車の装甲を貫通し、内部にて爆発する。

「勝てるぞ。突っ込め！！」

しかし、ヴィエルニでの戦闘が予想以上に手こずる事は、この時、誰も予想していなかつた。

市街戦

ヴィエルニ 市街前

「そういうえば、海軍のバルト海封鎖は完了したか？」

バルト海封鎖はエーベルトは海軍長官のエーリヒ・レーダー元帥に総統経由で命じておいた事だつた。

「まだ、完了はしていませんが、既にその様に動いているとの事。」

「分かった。」

市街地に?号戦車を戦闘に突入していく。

「各車に、周囲に気を付ける伝える。戦車では見晴らしが悪いからな。」

「了解。」

戦車での市街戦は視界の狭い為、非常に不利なのだ、しかし、これを占領して一旦補給を受けないと?号戦車は動けなくなってしまう。

「!、上方より歩兵だ!!」

しかし、建物に隠れていた歩兵は爆弾を投下。一番前を走る?号戦車にその爆弾がくつ付き、爆発。破壊された。

「畜生。」

砲身を上に向け、

「撃て！」

127mm砲を再び身を隠した歩兵に向けて放った。隠れていた場所は吹き飛び、先ほど爆弾を投下した歩兵が落ちてきた。

「バツクしろ。」

しかし、再び爆発が起つた。

「どうした？」

「突入した戦車20台の内、前方の戦車はたつた今破壊され、最後尾の?号戦車との通信も途絶えました。」

「何だと!?では、我々は袋のネズミではないか。」

一本道しかない道路で、先頭車と最後尾車が破壊された為、身動きが完全に取れなくなってしまった。

「野砲が後方車に向かって砲撃。」

「装甲が固い。破壊されることはない。」

前方では先ほど破壊された?号戦車が炎上しており、その前から野砲が現れる。

「ハッチ閉じ。何かに?まれ。」

急いでハッチを閉じ、乗員は手近な物にまる。その瞬間、衝撃が走った。

「いい気になりやがって。」

運転手に変われと要求し、ヘルメットが運転席に座る。

「無線手、後続車に続けと命じろ。」

アクセルを踏み込み、燃えている戦車に体当たりして退かした。

「野砲を踏み潰す。機銃手、野砲から逃げる砲兵を撃ちまくつてくれ。」

「司令、歩兵も反対側から市街地に突入。市街戦が起っています。」

「こっちも手一杯だ。前方より、7TPが8台。」

「各車、散開。通りを蹂躪して占領する。建物を破壊しても構わん。」

残った18台がそれぞれ散開し、分散した7TPを各個撃破する。

「田標、7TP戦車。砲手、一発で当てる。」

主砲を7TPに向け、発射した。

「よくやつた、命中だ。」

破壊されたFTTPは無残にも砲塔が吹っ飛び、不格好な形になってしまった。

「占領だ。」

ここまで来るのに、？・？号戦車合計8台、？号戦車6台、？号戦車3台を損失。歩兵は途中で5千人程度。しかし、市街戦で8千人が戦死していた。

夜になり、各方面からの戦闘集計がもたらされた。

「はい、司令官さん。」

「全く、どうやって女性が、しかもエルフが軍に入れたんだよ。採用した奴の顔が見たい。」

本当にエーベルトの副官になってしまったエルフはその日の戦闘詳細がびっしりと記入された報告書を持ってくる。

「そういう、まだ名前を聞いてなかつたな。」

「私の事はデイエ・ショーネ・ヴェルトって呼んで。」

「美しい世界か。じゃあ、ディエでいいか?」

「ええ。階級は中尉です。」

「じゃあ、デイヒ中尉。退室してよろしく。」

「はい、司令官。」

敬礼をし、部屋を出ていく。

「各方面でも予想以上の反撃を受けたんだな。」

西部方面は完全に占領したが、損害は史実よりも多かつた。

「こりゃ、マジでベルサイユ条約破棄前から戦車とか生産しといて良かつたな。」

?・?号戦車の損害は歩兵支援の筈なのに異様に多く、?・?号戦車はそれなりの損害は受けている。?・?号戦車はポーランド戦には投入せず、十分な数を揃えてフランス戦に主力として投入されることになっていた。?・?号戦車はポーランド戦におよそ70台が参加しており、?号戦車が一台、車輪を破壊されて擱座となり、戦車回収車にて本国へ移送された。

航空機は戦闘機36機が空戦で損失。相手の損害は126機（恐らくは過大戦果）と記録されている。対空砲で8機が墜落、洋上に出た1機が行方不明。爆撃機は戦闘機によつて40機損失、対空砲で12機損失、着陸ミスで3機損失。爆撃による地上撃破が航空機300機以上、戦車他車両100台以上と記入されている。

（航空機の損害が多いのは仕方がない。史実ではポーランド空軍の

エース級の奴らは全て逃げているのだから。そして、バトル・オブ・ブリテンで戦果を挙げている。しかし、史実よりも多くの航空機を運用し、脱出する前に空域封鎖を行えば、連中は脱出できずに戦うしか無い。だから、損害は増えるが、後を思えば楽になる。空軍にはもう少し頑張つてもらおう。）

明日からワルシャワへ本格的に空襲を開始する。急降下爆撃隊は引き続き機甲師団の進撃を掩護するが、水平爆撃隊は都市部への爆撃が主任務とされる。

（ソ連の侵攻は、独ソ不可侵条約無締結のこの世界にあり得ない。）

（この世界では、まだ独ソ不可侵条約は締結されていないのだ。その代り、色々と策略が練られている。）

（總統、ポーランド占領後に三国同盟を一時凍結をし、独ソ同盟を締結。密約に添つて日本がソ連に侵攻し、ソ連を支援するとの名目でソ連領内に侵入。油田を始めとする地点を確保したら、独ソ同盟破棄、三国同盟復活でソ連を占領。絶対に果たしてくださいよ。）

既に歴史を知っているエーベルトのとつて、先を読むのは容易かつた。ポーランドを占領すれば、東部を分割しろと言つてくるソ連に対し、分割を条件に独ソ同盟を締結させる目的があった。そして、強計画で建造された20隻の輸送潜水艦の内の5隻で、30台の？号戦車を日本へ送る。それを使ってソ連侵攻を開始。ソ連を支援するという名目で油田などの地点を確保した後、破棄してソ連侵攻。ある意味、卑怯な手でもあった。

（明日、ワルシャワを落とす。）

しかし、エーベルトにとって社会主義は許す事のできない主義だつた。それに、個人的にスターリンを嫌っている。そして、それに加担したイギリスとアメリカも。

（両国を落とすまで、終わらない戦争。気が、遠くなるよ。）

彼にとつての終焉は何処なのか？それはまだ、誰にも分からなかつた。本人でさえも。

首都攻撃

翌朝から再び進撃を開始した。ポーランド国内を縦横無尽に駆け巡るドイツ軍に、ポーランド装甲連隊は壊滅し、ポーランドにとって有力な騎兵師団で対抗するしかなかつた。

「騎兵隊など、後方の歩兵部隊に任せろ。」

ヘルト指揮する第6機甲師団の所有する120台の戦車は出現する騎兵師団を無視し、ワルシャワを目指して一直線に走る。

「戦車が走っています。攻撃する気はないのですが。」

「戦う意思のない敵など放つておけ。空軍に要請して急降下爆撃機を派遣させや。」

「了解。」

すぐさま空軍のショットウーカが駆けつけ、急降下を開始する。

「目標、ポーランド戦車。」

急降下爆撃機を指揮するのは、有名な戦車破壊王『ハンス・ウルリッヒ・ルーテル』だった。史実でのポーランド戦では偵察機の配備だったのに、ヘルトが色々と手を回して爆撃隊配備にした。

「投下。」

投下した60?爆弾4個はポーランド戦車群の中央に命中。数台を巻き込んで破壊した。他の者も急降下を開始し、逃げるポーランド戦車を壊滅させる。

「残りは下の部隊に任せればいい。」

上昇させ、帰還を始めるルーテルの部隊は下に居るヒーベルトの指揮する第6機甲師団に無線に報告する。

「やはり、ルーテルを急降下爆撃隊に配備して正解だつたな。」

「それよつもぢります?。あの残つた戦車は。」

「せうだな・・・・、6台だけ?戦車を送つて撃破せん。指揮はヴィットマンが執ればいい。」

第一次大戦の戦車工ース、ミハエル・ヴィットマンも第6機甲師団として参加していた。その彼に6台の?号戦車を預け、ヒーベルトはワルシャワを目指して前進を続ける。

「撃ち方用意よし。」

「撃て。」「ヴィットマン乗車の?号戦車は、逃げるポーランド戦車を捉える。

発射された砲弾は、左を走る戦車に命中して破壊した。よつやく気が付いた戦車隊は、反撃しようと散開。攻撃を始めた。

「やるじゃねえか。」

反撃を受け、車体が思いつきり揺れたヴィットマン乗車の?号戦車は次に向かつてくる戦車に狙いを付ける。

「撃て。」

戦いは一方的だつた。訓練不足が出でているポーランド軍は、各戦線に敗退を喫し、次々と首都へ追い込まれている。ポーランド政府は、降伏の用意を少しずつ始めているのだった。ポーランド戦線に投入されたドイツ戦車の総計は8000台以上（史実では2400両ほど）。航空機は3000機以上が投入された（史実の開戦時の保有機全て）。

「南方軍は合流しました。」

ポーランドの南を蹂躪した部隊はサン河のフルシャワから見て反対側に集結し、渡河の用意をしていた。

「北方軍から、何時でも突入できると言つ報告が来ました。」

「そうか。」

南方軍司令官ルントシュコテット上級大将は集結した南方軍総兵力を見て、

「これから、空軍が最後の猛爆を開始する。それが終了次第、我々南方軍は首都ワルシャワへ攻め入る。」

北と南から挟み撃ちし、逃げ場を失つたポーランド軍を一気に降伏へと追いやる計画だった。

「来たぞ。」

4発大型重爆、ME264を始め、史実では完成、もしくは活躍できなかつた爆撃機がワルシャワへの最後の爆撃を始める。

「田標、ワジンキ水上宮殿。投下!—」

官庁街の中心に位置するワジンキ水上宮殿田掛けて爆弾が次々と投下される。

「爆撃続行中。ワルシャワ市内に、逃げ惑う市民を確認。」

爆撃隊は上空からワルシャワ市街を逃げ惑う市民を見る。彼らも、作戦とは言えこんな真似は出来ればやりたくない。

「これで、降伏すればいいのだが。」

官庁街を中心に、ワルシャワの40%を近くを破壊した爆撃隊は人々と飛び去る。ポーランド空軍は既に飛行場を破壊され、飛び立てるにおり、首都に空軍兵も歩兵として防衛に付いていた。だから、爆撃隊は戦闘機を気にせずに毎間から堂々と爆撃できたのだ。

爆撃が終わり、南北から戦車や歩兵が突入する。

「前進し、その交差点を陣取れ。」

エーベルト乗車の？号戦車は見晴らしの良い交差点を陣取り、そこから周囲に居る戦車を撃破した。

「爆撃の中を戦車が生き残るなんて、運のいい戦車だ。」

破壊された戦車を見て、エーベルトは言ひ。しかし、生き残れたのは中心街に居なかつた戦車のほんの数台で、殆どは官庁街のある中心部に居たため、戦車隊はもう居ないも同然だつた。

「北部は20%を占領。南部は15%を占領しました。」

「後は歩兵に任せろ。戦車での市街戦はもう十分だ。」

前の戦いでやはじじんなに優れた戦車でも市街戦は不向きだと学んだエーベルトは戦車を市外周辺に配置し、逃げるポーランド兵だけを狙わせた。やはり、市街地は歩兵のみで突入するのがベストだろう。

「たつた今、ラジオを傍受。ポーランド政府は、降伏すると発表しました。」

脱出した戦車を撃破したところで、無線手がそう伝える。

「そつか。これで、ポーランドは終わつたんだな。」

開戦から僅か2日間でポーランド政府は降伏。近代戦史、稀に見る早業でドイツはポーランドを降伏に追い込んだのだ。

「はい。しかし、たつた今本国からのラジオ放送で、英仏が宣戦布告しました。」

「やっぱり、布告してきたか。」

歴史通り、1939年9月3日。英仏、ドイツへの宣戦布告。長い長い、第二次世界大戦の火蓋は、切って落とされた。

策略

9月5日。エーベルトの予測通り、ソ連はポーランドの東側分譲を要求してきた。

ベルリン 総統官邸

「エーベルト君、今回のポーランド侵攻は見事であった。」

総統命令で呼び出されたエーベルトはベルリンの総統官邸を訪れていた。

「はい。それで、ソ連はやはりポーランドの分譲を要求したのですね？」

「うむ。余は、この申し入れは受け入れ難いと思っている。共産主義の赤軍など、我が機甲師団を持つてすれば全滅も容易いのだ。どう思つ？」

「確かに、現兵力を鑑みるに、可能でしょう。ただ一つ、燃料があればの話ですが。」

「どういう事かね？ エーベルト大将。」

「ポーランド侵攻に大量の戦車を割いてしまい、燃料が大量に失われました。兵力の再建は可能ですが、燃料が無ければ戦車や航空機は役に立ちません。」

「では、余にどうしようと？」

「ソ連との一時的な同盟。勿論、三国同盟の一時凍結とフランス侵攻。私の機甲部隊を除き、ポーランド侵攻に参加した部隊はその後、東部歐州の侵略に投入されてしまっている。チエコをはじめ、ルーマニアやギリシャにまで侵略を開始しております。これでは、燃料は底を尽き、西部方面まで燃料が持ちません。幸い、ソ連には有力な油田があり燃料などの軍事物資を輸入すれば良いでしょう。」

「余に、宿敵スター・リンと同盟を組め。と言うのか？」

「總統、一時的だと言つたはずです。日本が居るではありませんか。」

「極東の同盟国か。あの国にソ連を席卷できる力は無いと思つぞ。」

「我々の?号戦車を潜水艦を使って日本に送り、それを使ってソ連侵攻を日本が行わせます。そして、ソ連支援を名目にソ連領内に入り込み、重要都市に到達後に三国同盟の復活でソ連攻撃開始。これが、私の考えた戦略です。」

「面白いな。確かに、面白い。」

「外務大臣、リッペントロップを日本に派遣させましょう。彼らに、アメリカとの戦端を開かせず、まずはイギリスを落とすのを先にします。アメリカの植民地は特に重要な石油などありませんから、イギリスを落とす事に賛成するでしょう。」

「当面の敵をフランスとイギリスを最大の敵対国にする・・・か。」

「ベルト君。」

「はい。」

「その策、成功を期待しておるが。」

「ありがとうございます。総統。」

9月6日、リッペントロップは日本へと長距離重爆撃機に乗つて東京へと向かつた。そして、同日。?号戦車を積んだ輸送潜水艦がキール軍港を出港し、日本を目指して航行を開始した。

9月7日、ソ連外交官ヴァチエスラフ・モロトフがベルリンに到着。独ソ同盟が締結され、同日ポーランド東側を分譲され、石油などの軍事物資が大量にドイツ占領下のポーランドに運ばれてきた。

ビュンスドルフ　陸軍総司令部

「總統、どういう事ですか！？」

エーベルトは陸軍総司令部にて再びヒトラーに謁見した。

「北欧にいきなり侵攻を開始するなんて、北欧に我が同盟国のフィンランドがあるのですよ。それに、侵攻を開始したノルウェー北部には政府ですら極秘のドイツ海軍ドックがあります。早急に、北欧侵攻は中止してください。」

9月7日。独ソ同盟の裏で、ドイツは海軍支援もとに陸軍を北欧のノルウェーとスウェーデンに上陸を行った。デンマークにも侵攻し

たが、僅か3時間足らずで戦闘は終わり、占領された。

「スウェーデンの鉄鋼が必要でな。その迅速な補給の為にスウェーデンは必要だつたのだよ。」

「かと言つて、あの国は我が國に友好的だつた筈。交渉次第では、どうにでも成つた筈です。」

「その友好国が、こんな物を贈つてくれるかね。」

そう言つて、ヒトラーは電文をエーベルトに見せる。

『スウェーデン政府は、今後一切の鉄鋼輸出を停止する。』

「こんな物、どうせイギリス辺りの差し金ですよ。あの国にそんな勇気はありませんからね。イギリス辺りが誑かしたのでしょうか。」

「エーベルト君、だから余はスウェーデン侵攻を行つたのだ。」

「大体の事情は分かりました。しかし、ノルウェーは？」

「ノルウェーとの海上補給路が寸断され始めてな。報告では、ノルウェー沿岸砲台から攻撃を受けたという事だ。」

「それも、イギリス辺りが誑かしたのでしょうか。まあ、侵攻してしまつたものは仕方がありません。フランス侵攻の兵力に支障が無ければ、どうとでもなるでしょう。」

「エーベルト君、何故そんなに勝ちを急ぐのだね？」

「總統、あなたの育て上げた空軍と陸軍。あれが最強だと、世界に見せつけるためですよ。」

「君が軍を離れ、兵器産業省を立ち上げて兵器を生産していたからではないのかね？」

總統は椅子から立ち上がりエーベルトの所に近づいてくる。

「總統、勝利するには？・？号戦車では不十分でした。その為の兵器産業省です。」

「余は、君に感謝しているのだ。ドイツの危機を見ていた人間が余以外にも居たことを。」

「ただ一人、總統だけがドイツの未来を案じていた。そうですよね？」

「余は、世界を見ていたのだ。ドイツだけでなく、世界を。」

それを言い残し、ヒトラーはベルリンに戻った。

(總統、貴方の見てるのは世界ではなく、ドイツ人だけでしょう。)

エーベルトは、ただそれだけを思つた。

進撃用意

トリール

ここに、フランス侵攻部隊の主力戦車部隊が次々と集結を始めた。

「グデーリアン大将、閣下の部隊がルクセンブルを落としたと同時に我が第28機甲師団と合流。ベルギー国境を突破してアルデンヌを抜け、フランス国内に侵攻する。それで、宜しいですね?」

エーベルトは、ドイツ電撃戦の創設者であるハインツ・グデーリアン大将と作戦の打ち合わせを行っていた。

「そうだ。君は、確かポーランド戦線では自らも戦車に乗つて陣頭指揮を執つたそうじゃないかね?」

「はい。」

「陸軍総司令部では専らの噂だよ。指揮官がそんな危険を冒してまで前線で指揮を執る必要は無いと。」

「戦場にいる以上、私は部下と同じ危険を味合わなくてはならない。それが、私を信頼して付いて来る部下へ、私が出来る最大限の行いだ。」

「しかし、それで指揮官を失つてしまつては、元も子もないがね。」

「そうなつた時は、私はその程度の人間だつたつて事ですよ。」

「では、今回も君は最前線で指揮を執るのかね？」

「勿論。必要なら、私が先陣を切つて敵中の突入しても構いませんよ。」

フランス戦に投入される戦車は全部で9000台。その内の約半数がアルデンヌ突破に使用される。

「いや、やはり君はレオパルドで部隊の中間で指揮を執る方が似合つているよ。」

「はあ。」

暫く、グーテーリアンは黙っているが、突然話題を変えて

「そう言えば、向こうでも戦車の集中運用部隊が1個師団だが編成されたそうじやないかね。」

「ド・ゴール将軍のS35中戦車で編成された機甲師団ですか？あんなの、ドイツ戦車なら十分撃破可能ですよ。」

史実では、装備している戦車があれなので、苦労を強いられた。しかし、現在機甲師団の主力は戦車なのだ。十分に撃破可能。

「空軍の掩護は十分だそうだ。航空機を揃えられる限界の5000機近くを国境線に配備したそうだ。」

「5000機も、ですか。」

「エーベルト大将。空軍も、捨てたもんじゃないよ。なんせ、電撃

戦成功の要は、空軍なのだから。」

「それは、分かっています。」

そこへ、司令部付きの通信将校が入つて來た。

「閣下、海軍總司令部から報告です。本日生起した北海海戦において、我がドイツ海軍は戦艦2隻、空母1隻他重巡などを含わせて、2隻撃沈したと報告してきました。」

「1、12隻も！？」

「はい。我が方の損害は駆逐艦2隻が沈没しただけの模様。海軍始まって以来の大勝利です。」

「敵戦艦、艦型は？」

「ネルソン級だそうです。2隻とも。」

「砲撃で沈めたのか？」

「戦艦は砲撃で沈めました。残りは空母艦載機です。」

「そうか、空母も既に運用を始めたのか。」

史実では空軍の妨害や資材が無い為に空母が完成させられずに、ドイツ航空機動部隊の夢は潰えた。しかし、ノルウェー北部で建造された空母と總統命令での航空機動部隊編成が成功。運用が始まっている。

「エーベルト大将、私は未だに海軍の航空機動部隊編成の必要性が分からぬのだが、君は確か陸軍でありながら海軍航空機動部隊の編成を強く推進していたそうだね？ 何が有効なのか、説明してはもらえないだろうか。」

グデーリアンは空軍の航空機運用は納得できていたが、海軍の航空機運用が納得できていなかつた。

「えーとですね、まず空母は洋上の航空機基地と思つてくれればいいです。そして、我がドイツ初戦機の弱点は航続距離不足。まあ、これは長い航続距離を持った機体を生産中なので、直に問題なくなるのですが。現在の主力機であるBF109では、今後攻めることになるイギリス奥地まで十分な爆撃機護衛が出来ないんです。そこで、洋上の空母にて補給。奥地侵攻つて、事ですよ。」

「なるほど、大体は分かつた。確かに、我がドイツの保有するBF109は片道400？程度。これでは、イギリス上空に戦闘等も考えると20分程度しか留まられないからな。」

「それでは、奥地まで護衛できないので、途中の補給基地が必要なんですよ。それが、空母です。」

「なるほど。それに、空母があればイギリスの何処でも自由に狙えるな。」

「はい。北部工業地帯も、十分狙えます。」

イギリスの北部には工業が盛んなグラスゴーなどがある。そこを重点的に爆撃する計画も海軍が建て、実行用意に入っている。

「しかし、我々の本命はまず、フランスの占領です。」

「エーベルト大将、貴軍の活躍も十分に期待している。」

イタリアも侵攻用意に入つたが、当然誰もイタリアの力など当てにしていない。まともな戦車を保有していない。自走砲はセモヴェンテ da 93/53があるが、まだ実用化されていない。戦闘機はファルゴーレやあの第二次大戦最強の戦闘機と名高いP 51にも引けを取らない名機と言われているベルトロがあるが、まだ実用化されていない。

「イタリアには、期待・・・」

「していない。」

グデーリアンはハッキリとエーベルトに告げた。悲しいが、ドイツ軍の間では『今度はイタリア抜きでやろうぜ』とまで言われた弱体軍だから。ムッソリーニの軍備増強はヒトラーほど徹底していなかったのだ。

「では、作戦説明は終わりだ。どうせ、止めても最前線で指揮をするのだろう。前進は、任せた。」

「了解しました。グデーリアン大将。」

乗車のレオパルドに乗り込み、ヘッドフォンセットを付け、出撃命令を待つた。

「エーベルト大将、私はここに配属になりました。」

「君、一体どうやって私の副官になり、しかも最新鋭戦車レオパルトの操縦手になつたんだよ?」

「内緒です。」

エーベルトの副官であり、この世界にエーベルトを呼び寄せた張本人。ヘルフ、ディエ中尉が、エーベルト乗車のレオパルド一号車。その操縦手に配属されていた。

「エーベルト閣下、総司令部より全軍に作戦を開始せよとの通達です。」

「分かった。」

そう言い、前進の命令を配下の第28機甲師団に下す。それを見た戦車隊は、次々と前進を開始したのだった。

1940年、3月7日。ドイツ、フランス侵攻開始。

アルデンヌを突破せよ 前篇

ルクセンブルク

「前進を続ける。」

出撃してから燃料補給以外で止まることなくエーベルト指揮の第28機甲師団は前進を続けた。グテーリアン指揮の第19機甲師団はルクセンブルクの南部を制圧後にアルデンヌ突破を開始する予定だった。

「歩兵と第11機甲師団から通信。ベルギー国境線を突破し、戦闘を伴いながらも進行中。沿岸部隊の第2歩兵大隊と第3歩兵大隊、第10機甲師団からは順調に進行中との事。」

無線手が戦況を報告する。

「分かった。第2爆撃隊と第1輸送大隊に、ロッテルダムの攻撃を命じる。輸送機からは空挺部隊降下。占領要請を出せ。」

「了解。」

港湾都市ロッテルダムを抑えれば、オランダの大半はダンケルクを目指す必要がある。史実のダンケルク撤退戦を知っているエーベルトは海軍に支援要請を出していた。巡洋戦艦シャルンホルストとグナイゼアフを護衛の艦艇と共に出撃。シボートをドーバーの至る所に配置し、撤退を始める輸送船を沈める計画だった。更に、空母までも動員してこれを掩護させる。

「順調だな。」

エーベルト指揮の第28機甲師団は敵に発見されることなく突き進んだ。

アルデンヌの森

「気を付けるよ。」

アルデンヌの森に入つた機甲師団は遅れて到着したグデーリアン指揮の第19機甲師団と共に前進していく。

「閣下、ベルギー方面は大戦果だそうです。進軍に歯止めをかける存在は、もう居ないそうです。」

「そうか。こつちも、突破したら即戦闘だからな。」

エーベルト乗車のレオパルドの横に、グデーリアン乗車の?号多砲塔戦車が並んだ。

「エーベルト大将、貴軍の前進が少し早い。これでは、直ぐに燃料切れになるぞ。」

「グデーリアン大将、こちらは急いで突破しないといけないんですよ。他の部隊に戦果を取られちゃあ、士氣にも関わりますからね。」

「だからって、もう少し進軍速度を落とせんかね?これでは、補給部隊が追いついてこれんよ。」

第28機甲師団の平均進軍速度は現在28?ノット。異常なまでの進撃速度だった。戦車もオーバーヒートして何台かが落伍した位だ。

「落伍した戦車は後方の歩兵部隊に任せれば十分です。こつちは今、最高の進撃速度を記録しているのですから。」

「号多砲塔戦車がだんだん離れていく。速度が限界に達したのだろう。」

「それでは、突破一番手の名誉は、自分が頂きます。」

しかし、アルデンヌの森を1日で突破する事は出来ない。広く、密度の高い木が進撃の邪魔になり、後半は思う様な進撃が出来なかつた。夜間の進撃は危険の為、野戦キャンプが張られた。

「半分位の進撃だな。」

「はい。」

合流したグデーリアン大将が夜戦キャンプの本部に入つて來た。

「君の部隊でも、一日で突破は不可能だつたか。」

「はい。」

エーベルトは汗だくだった。まだ、暑い季節ではないが、ジメジメした森を空調機が付いていない?号戦車で、しかもエンジン全開で走り続けたのだから当然だつた。

「私の部隊は8台がオーバーヒートで落伍しましたよ。内、2台は追いついてきましたが、あとは追いついてきません。」

「全く、だから進撃速度を落とせと言つたのだ。このままでは、戦う前に大半が落伍するだ。」

「はい。」

「幾ら電撃戦とは言え、エンジンに負荷をかけ過ぎてはならない。それが原因で8台がオーバーヒートしたのだから。」

「戦車は氷などで冷却させてあります。明日には、また全力運転が可能かと。」

「だから、進撃速度を落とせと言つたのだ。今日みたいなことを明日もする積りか?」

「はい。」

「はい、じゃないだろ?...!」

グデーリアンは怒り氣味だった。大事な戦車を戦う前から戦闘不能にし、また明日も同じことをしようとするのだから。

「失礼します。」

と、ヘルベルトの副官であるティエリ中尉が入つて來た。

「ヘルベルト大将、本日の戦闘集計が入つてきました。」

「 そつか。」

そつ言つて受け取り、暫く読んだ後にグデーリアンに渡した。

「 作戦は順調のようだな。」

「 ええ。」

グデーリアンはそれを見て、とりあえず安堵した。

「 閣下の考案した電撃戦は各方面で成功を出しています。明日は、我々が結果を残しますでしょう。」

「 そつだな。しかし、今日のよつな進撃速度は絶対にするなよ。」

「 分かりました。グデーリアン大将。」

敬礼をし、自分の寝るテントに戻った。

イギリス 首相官邸

「 首相、もはやドイツの進撃は凄まじい限りです。ベルギーは明日にでも降伏し、フランス国境を突破されそうな勢いです。」

補佐官が英國首相チャーチルに大陸での戦況を説明する。

「 うぬぬ、ファシストめが。」

持つているペンを折り、壁にかけられている歐州の地図に向かって投げた。ペンは見事にドイツの首都、ベルリンに突き刺さった。

「ファシストの侵攻を止める手段は無いのか…？」

「ぐ、空軍から早急に航空機を送るべきとの要請が。それに、更なる地上軍の増派が陸軍からは来てします。」

「戦争は大陸では終わらん。これ以上の増派は我が国にの防衛力欠如に繋がる。」

「し、しかし首相。フランスは、もはや敗北が決定的です。増派がなければ、一週間と持ちません。」

「負ける戦場に、わざわざ増派の必要も無かる。可能な限り船を集めたまえ。必要なら、漁業組合から漁船などの船舶を徴用しても構わん。」

「は、了解しました。」

「それと、工場は北部に移す用意をしたまえ。これから、液体の雨ではなく、爆弾の雨が降るだろつ。」

「はい。」

そう言って、補佐官は出て行つた。

「畜生め、ファシスト。アメリカの参戦があれば、こうはならないのに。」

電話を取り、アメリカのルーズベルトに繋いだ。

「同志、ルーズベルト。貴国は一体何時になつたら参戦してくれるのだ？もはや、貴国が送つてくる義勇軍だけでは戦えない状況なのだ。」

『まあ待ちたまえ同志、チャーチル。日本との交渉をのらつくらりで引き延ばして戦端を開かせる交渉を行つておる。直に、日本は我が國との交渉を始めるだろうからな。』

「日本は、中国で一杯一杯です。戦端を開くとは、到底思えませんが。」

『奴らは都合のいい事に石油が取れない。その石油を止めれば、枯渴の恐怖から戦端を開くだろ。』

「それはいい考えです。その時、我が國も協力いたします。」

『同志、チャーチルよ。今度の会談は我が国の戦艦であるウエストバージニアに行おうではないか。』

「それは良い考えです。では、時間等は後程お聞かせください。」

そつと置いて電話を切り、床に就いた。

アルデンヌを突破せよ 後篇

「前進開始。」

朝になり、再び進撃が開始された。喉咽式マイクは騒音下でも聞き取りやすく声を伝えてくれる。

「アルデンヌを今日中に突破し、フランス機甲部隊の後方にいる。」

マジノ要塞が唯一効力を発揮できていないアルデンヌの森の出口からフランスの防衛ラインを切り崩すアルデンヌ突破戦は最終ラインまで達した。

「さて、こいつの主砲が早く敵を喰いたいと唸つているぞ。」

ヘルベルトはレオパルドの主砲を撫でて、砲手に囁く。

「大将、こんな素晴らしい戦車で、一緒に出来て光榮です。」

「ああ。確り頼むぞ。」

出口まで、もう一時間と走り抜けて到達できる。そしたら

「戦闘開始だ。」

だった。

「お、おこあれ！？」

アルデンヌの森を照会中の斥候部隊がアルデンヌを進む独戦車隊を見つけた。

「し、至急！本部に連絡だ！！」

急いで通信兵は無線機で本部に繋ぐ。

「！」、こちらアルデンヌ哨戒班です！。独戦車隊が大挙してアルデンヌの森を通過中！』

『アルデンヌの森を？馬鹿も休み休み言いたまえ。』

当時、フランス軍上層部内で誰がアルデンヌの森を戦車で通過しそうと考える者は居なかつた。

「ほ、本当です！－－ドイツの大型戦車を中心に、大挙して通過します！－－通信訓練ではありません！－－」

『分かつた分かつた。警戒だけは出しあいてやる。』

半分は眞てにしていなかつた。

「通信を傍受。」

「何？」

エーベルト乗車のレオパルドに、先ほどの会話が傍受されていた。

「敵は我々の通過を伝えたようですが、司令部は誰も取り合わなかつたみたいですね。」

「だろうな。フランスの堅物に、こんな森を突破してくるなんて考える人間は居ないよ。」

その時、出口が見え始めた。

「じゃあ、やつきの報告が正しいかどうか、敵さんに分からせてあげましょ。」

森を突破した戦車隊は、案の定、敵機甲師団の後方に出了れた。

大半の部隊がベルギーの掩護に向かっていた為、残った僅かな兵力で反撃しなくてはならないフランス連合軍と、主力戦車隊と随伴歩兵部隊を投入したドイツ軍とでは戦力差も士気も、違い過ぎた。

「撃て……」

シャル2Cを主力に、ソミュア35中戦車を配備したフランス国境防衛機甲師団はフランスで唯一の機甲師団だった。これが破壊されると、機甲師団を編成する余力のないフランス軍の崩壊は当然だつた。そして、それを知っている独戦車隊はこれを何としても撃滅する必要があつた。

「田標命中。良い腕だ。」

35中戦車に直撃し、炎上している。

「敵さん、混乱します。」

「ティエ、左に前進。一気に挟み込む。」

「了解。」

5台のレオパルトを率いて、エーベルトは左から挟み込んだ。

「パンターでも・・・十分だな。」

パンターの一撃で、シャル重戦車が炎上する。

「後は・・・つと、航空部隊が来たか。」

見ると、ショットウーカが編隊を組んで飛来してきた。

「離れるべ、巻き添え喰いたくなきや離れろーー！」

独戦車隊は一旦砲撃をやめて距離を取る。猛訓練を積んだ独空軍の急降下爆撃隊がミスるとは思えないが、万一事もある。

「田標、仏戦車部隊。投下！！」

急降下爆撃隊は狙い通りに戦車に爆弾を投下。数台を破壊した。

「後は戦車隊に任せろ。我々は帰隊する。」

「へー、案外腕はいいんだな。」

「急降下爆撃隊より入電。貴軍の健闘を祈る。つだ、そうです。」

「そうか。」

つと、言つても。もう大半が破壊されている。元々、フランス軍は戦車は歩兵支援が当然と考えており、編成された機甲師団つとあっても40台にも満たない少數の戦車しか配備されていなかつた。

「グデーリアン大将より、貴軍は補給を受けよ。ひとの事。」

「ディエ、燃料に余裕は?」

「えーと、ありません。」

「分かつた。後退して、補給を受ける。破壊した戦車は随伴歩兵に任せておけ。」

後退をして、アルデンヌの出てきた所で燃料の補給を始める。

「上出来ではないか。」

「どうも、グデーリアン大将。」

グデーリアン大将の部隊は更に前進を開始し、国境線沿いに次々と街を占領して海を目指している。英仏軍は海へと追い詰められていく。

「敵は、ダンケルクを目指しているそうだ。君の読みが当たったね。

」

「沿岸部隊の位置は？」

「ダンケルクまではもう少しだそうだ。潜水艦や艦艇は海軍からの報告では北海を通過してドーバーまであと少しつて所らしい。レーダーがダンケルクを目指す大量の船を捉えたそうだ。」

「そうですか。」

ダンケルク撤退戦を阻止せねばならない。英國本土上陸を敢行するには、その大勢の脱出を防ぎ、イギリスの防備を削ぐ必要があった。それに、大勢の人命が失われれば、講和に応じるかもしれない。

「君は、？号多砲塔戦車に乗らないのかね？あれは良い戦車だぞ。指揮もしやすいし。」

「ええ。しかし、あれは装甲が薄いので前線での指揮は向きません。なら、速度も速く、装甲の厚くて強力な主砲を備えるレオパルドでなら、十分に前線で指揮ができます。」

「ふむ、しかし君の部隊でも中隊長は乗つてあるぞ。それなのに、君が乗らないとなると少し。」

「乗りたいなら乗せればいいです。」

「まあいい。君に、總統から命令が来てている。」

「はい？」

この重要な作戦の最中に新たな命令？

「至急、副官と共に本国へ出頭せよとの事だ。君の部隊は、私が臨時に指揮を執る。」

「何でまた、こんな作戦の最中に？」

「分からんが、君の危険な行為に總統も目を向けたのだろう。指揮官が最前線で、しかも戦車で指揮を執る事はドイツ軍史上、前代未聞だからな。」

「何にでも初めはあるでしょう。」

「冗談言つてないで、戻る用意をしたまえ。」

「分かりました。」

表に強行着陸してきた「ローリング」乗り、本国へと向かった。

アルテンヌを突破せよ 後篇（後書き）

ここから先、見るも見ないも自由ですよ。なんせ、物語はとんでもない方向へ進んでいくので。

あ、別に死亡フラグ～っとかじやないけど。

總統要塞　連合軍暗号名『鷲の巣』

陸軍総司令部

「ヴァルター上級大将、私を前線が戻すとはどういつ事ですか？」

総司令部に出頭したエーベルトは早速、陸軍総司令官のヴァルター・フォン・ブラウヒッシュ上級大将に抗議をした。

「私にそれを言われても困る。全ては、總統閣下が命じられたことだ。」

「なら、その總統閣下に会わせていただきたい。」

「私にはどうする事も出来ないぞ。」

そこへ、SSの将校が入つて來た。

「エーベルト大将、總統がお呼びです。」

「分かつた。」

SS将校に連れられ、車はバイエルン州に入り、ケールシュタインを上つて行つた。

バイエルン州

「 」んな所に何が。 「

窓から外を見ると、山頂付近に建物が見えた。

(なるほど。 総統要塞、ケールシュタインハウスか。)

そこから見えるのは総統要塞、連合軍名『鷺の巣』だった。

「 」からは専用エレベーターでしか行けません。 「

鉄製の門を潜り、そこで車を止めて歩く。壁際には S S の警備兵がライフルやマシンガンを持つて警護していた。

「 総統は、本来は高所恐怖症なのですが、あの山荘でお過ごしなられております。 」

エレベーターのスイッチを押した将校は、エーベルトに説明する。降りてきたエレベーターの内部は真鍮で出来ており、それが鏡の役割も担っていた。

總統要塞 通称『鷺の巣』 -

ケールシュタインハウスだが、今では連合軍の付けた暗号名で有名となってしまっている総統要塞はヒトラーを始め、ナチス高官の多数が訪れていた。

「 ハイル・ヒトラー。 」

国防軍所属だが、あくまでもヒトラーの前ではナチス式敬礼を行つた。

「エーベルト君、貴君の働きには感心するもの大である。」

「總統、その感心する者を前線から遠ざけたのはなぜですか？」

「總統は君の事を高く評価しておるのだ。ついては、君にはプロパガンダの為にも戻つてもらつた。」

「ゲッベルス宣伝相、相変わらず、あなたはプロパガンダの天才だよ。」

ヨーゼフ・ゲッベルス宣伝省大臣。ナチス党員で、ヒトラーの片腕として宣伝活動に従事。今日でも、彼の宣伝手法は使われ続けるプロパガンダの天才。

「それは、お高く評価されたことで。」

ゲッベルスは感心したように言つ。

「ゲッベルス博士、その辺でいいでしょ。」

ヒトラーのもう一人の片腕であり、ヒトラーを慕い、ヒトラーに最も信頼されているナチス党員、ルドルフ・ヘスがその場にいた。

「エーベルト大将、貴君の働きに總統は高く評価され、貴君に初の大鉄十字星賞を授与されるそうだ。」

そう言つと、總統自らが大鉄十字星賞を授与した。歴史上、ナチスドイツ時代で授与された者は一人もいない。初の受賞者だった。

「君は、名実ともにドイツの英雄となつたのだ。」

最前線でポーランド軍を破り、アルデンヌでも最前線で指揮を執つたエーベルトはその成果を認められ、初の受賞が行われた。

「感謝します。」

「だが、君のとつては残念かもしけん。君は今度創設される独立陸軍に第28機甲師団を置くことになつた。ついては、部隊名を第28独立機甲師団となつたのだ。」

「独立陸軍？」

「そうだ。ついては、君の副官を除く全員が別の部隊に配属となる。君は」

「總統、到着されました。」

突然、SS将校が入つて来て、ヒトラーに伝える。

「そりか。君は彼らを指揮してもいい。」

入つて来たのは、まだ中学生を卒業したような少年・少女たちだつた。

「冗談でしょ、總統？この者たちはまだ、戦争のせの字も知らない子供ですよ。とても、戦力になるとは思えません」

「君は、特別幼年志願学校の存在を知つてあるかね？」

「特別、幼年志願学校？」

「再軍備宣言の日に合わせて創設した少年・少女らが軍人に志願した者を対象に入学させ、教育する機関だよ。彼らは、その一期生の中でも特に優秀な戦車長だよ。部下もな。」

確かに、立ち振る舞いは軍人そのものだった。ピシッと、背筋を伸ばし、綺麗に整列している。

「しかし、本当に彼らは？」

「子供だよ。それも、恐れの知らぬな。」

「確かに、そうですが。」

「受けてくれるな？」

半分は強引だった。

「わ、分かりました。」

「そうか。彼らを宿舎に戻せ。」

そう、SSに命じた。そして、ヒトラーは奥の部屋にエーベルトを連れて行く

「君には、その説もある。」

そつと壁に掛けられている幕を下ろした。

「君には、君たちの部隊にのみ専用戦車を提供する。」

その幕には戦車の図面と數田、そして完成図が描かれていた。

「IJの地下にはその一両車が置かれている。来たまえ。」

壁のスイッチを押し、IJの部屋が下に降り始めた。

總統要塞 地下兵器室

「ボ、ボルシェ博士ー!？」

その兵器室に居たのはエーベルトの立ち上げた兵器産業省に所属するフルディナント・ボルシェが居た。

「やあ、エーベルト大将。お久しぶりです。」

「しかし、何故ここに?」

「總統閣下が君への戦車を見せると言つてな。私自らが説明したかったのだよ。」

「そうですか。」

「その辺でやめときたまえ。博士、シーツを取るんだ。」

「はい。」

シーツに被せられていた物が、姿を現した。

「「」「これは！？」

長い砲身、それにレオパルド戦車よりも一回り程大きい車体と砲塔。そして、洗練された転輪とエンジン。

「これは、君が最終形態と名付けた、レオパルドの進化形だよ。」

ポルシェ博士が説明する。

「主砲は140mm70口径。射程は8？と言つ驚くべきものだ。装甲はレオパルドよりも大体30mmほど厚くなっている。エンジンは1600馬力のガスタービンエンジンを採用し、速度はかなり向上している。足回りも完璧だ。それに、様々な新兵器が搭載されている。砲塔旋回方式は？号戦車から採用したペダル式だが、固いと言つ前線の声を配慮し、レバーによつて固さを調節出来るようにした。」

「なるほど。」

「それに、砲身もレバーで固定できる様にした。そのお陰で、走りながらでも発射できるようになつた。その他、赤外線・暗視照準儀で夜間戦闘も可能だ。周囲には我がドイツエレクトロニクス技術の最高傑作、センサーも装備し、周囲に近づく歩兵を感じできるようになった。操縦にはハンドル式で、周囲の状況を見やすいように車外カメラなんかも装備している。もちろん、赤外線・暗視対応のな。

「

速度などは別とし、装備している兵器は戦後第3世代にも対抗できる戦車だった。

「自動装填装置は勿論、装備していますよね？」

「なんたって、子供が操るのだからな。大人でも、140mm砲弾を連續で装填し続けるなんかきつ過ぎる。だから、勿論装備したよ。しかも、最新式のを。このお陰で、連射砲並みの連續発射も可能だ。砲身には冷却装置も装備している。」

「やはり、ドイツの戦車技術は世界一ですね。」

「そうだ。我が1000年帝国は永久にその繁栄を掴みとれるだろう。君の部隊には正直、期待している。連合軍の撤退作戦阻止は貴君の進言通りに行動でき、輸送船などの撤退兵を乗せた船の9割以上を沈め、大半が海没した。」

「では、フランスも降伏しますか？」

「直ぐだろう。その時は、君も部隊を連れてパリに来たまえ。」

「はい。」

1940年3月28日、連合軍、ダンケルク撤退作戦失敗。32万以上の死者を出すと言う大損害を被り、イギリス防衛の要とも言える兵力を失った。航空兵力もドーバーを渡りきる前に空母から飛び立つた独海軍の戦闘機に襲撃され、7割以上が撃墜された。この作戦失敗は英仏に大きなショックを与える事になり、対してドイツ軍

の士気は一気に上がる結果となつた。

ライン演習作戦 前編

總統は続いて海軍に、連合軍を更に衰退させる目的で、ライン演習作戦を始動した。史実とは内容が違うが、ドイツ海軍主力が参加する初の大規模作戦だつた。

キール軍港

「艦隊を出撃させよ。」

キール軍港からは戦艦『ビスマルク』を主力に、シャルンホルストなどの高速戦艦、リュツォウなどの装甲巡洋艦などが出撃していく。支援用に潜水艦も6隻ほどが出港した。

ノルウェー北部 ドイツ海軍軍港

「キール軍港から艦隊は出撃しました。海軍総司令部より、我が艦隊にも出撃命令です。」

「そうか。北海とドーバーの制海権を掛け、我がドイツ海軍史始まつて以来の大規模艦隊作戦。生みの王者である大英帝国に対し、歴史の浅い我がドイツ海軍が何処まで挑めるのか。楽しみだな。」

北方主力艦隊指揮官『ヴィルヘルム・フォン・ティルピッヒ』海軍大将は艦隊に出撃を命じた。

「出港から7時間。イギリス海軍の無電を傍受し、敵が出撃したと言つ事です。」

ビスマルクが各艦船に警戒を促している。

「艦長、イギリス海軍が大挙として押し寄せた時、我々ドイツ海軍では戦力が違いすぎます。」

「分かつたから黙つていろ！！」

艦長は弱気になつた士官に大声で注意する。

「勝つも負けるも、最後はドイツ軍人らしく立派に死ねばいいのだ。」

艦長は生きて帰るよりも、死んで遺体として帰る覚悟も出来ていた。

「はい。申し訳ありません。」

「分かつたら、任務に集中しろ。」

「了解です。」

潜水艦は別れて敵艦隊の搜索を行つていた。ビスマルクなどの艦艇全てに性能差こそあるが、レーダーを装備しており、それで敵艦隊を搜索している。

「偵察機を飛ばすのは如何でしょうか？折角、水上機を積んでいる

ので、使わない手はありません。」「

ビスマルクにはA-r-196が4機搭載されている。

「省略工事で就役を早めたので、カタパルトは積んでいませんが、クレーンで下ろして水上を滑走させれば十分です。」

「そうだな。」

水上機がクレーンで水面に降りた後、エンジンを回す。

「全く、艦長は無茶言つよ。」

「同感だ。水上を滑走して離水し、敵艦隊を捜索せよなんて。」

「まあ、見つけねば俺たちの手柄だ。俺たち水上偵察部隊の評価も上がるつてもんよ。」

滑走を始め、離水した。

「偵察機、飛び立ちました。」

「そうか。頼むぞ。」

そこへ、電探室から報告が入った。

「敵編隊が接近中。数は50、それと、後方からも70機ほどが接近中！」「

伝声管を伝つて艦橋に聞こえたこの報告に、急いでヴィルヘルムは対応した。

「艦長、至急対空戦闘を命じよ。」

「了解しました。対空戦闘用意！――」

『対空戦闘用意！――対空戦闘用意！――』

『艦内マイクを使って命令が下され、対空機銃や高角砲に兵が付く。』

『敵編隊は前方より50機接近中。後方より70機接近中！――』

「俺らが落としてやるぞ――！」

機銃に付いた兵は前方か後方が、どちらかに照準を向ける。

「艦長、後方からの編隊がどうも気になります。」

「どういつ事だ？ 航海参謀？」

「イギリス軍機は我が国の航空機同様に航続距離が短いはずです。なのに、後方に回り込む燃料的な余裕は無いはずです。」

「では、後方の編隊は何だと考える？」

「私は、味方機かと。」

「しかし、それであ味方という識別信号を送つてくればいいだけでは？」

「艦長は聞いたことありませんか？我が海軍に極秘艦隊が居る事を？」

「？」

「聞いたことはあるが、迷信ではないのかね？」

「私も、最初はそう思いました。しかし、イギリスのネルソン級を沈めたと言う我が海軍籍には無い謎の艦艇。あれは、もしかすると極秘艦隊が遭ったのでは無いでしょうか？」

「確かに、ネルソン級は謎の艦隊が沈めたと言つ噂は耳にした。統発表では事故による爆沈とも報道されている。」

ネルソン級の撃沈の報告は数々の噂が立つた。表だって参加できなイエーベルトの強計画で建造された軍艦を中心に編成された艦隊はドイツ海軍内でも極秘事項だった。

「航海参謀、君の先ほどの後方編隊が味方だと言ひし讐説。絶対だと、言い切れるか？」

「はい。」

力強く返答した。

「さうか。各目標を、前方の編隊に集中させよ……。」

「やれやれ、気付いたようだな。」

航海参謀の言つとおり、後方の編隊は味方機だった。戦闘機70機が防空任務に向かうべく、アイスナー級空母から出撃した編隊だつた。

「では、我々も初めての大規模空中戦だ。気を抜くなよ。」

新型艦上戦闘機『Bf16A』はフルスロットルで艦隊上空を通過していく。

「見ろ、味方機だ！！」

艦隊に居る兵も士氣が高まつた。上空を悠然と編隊飛行し続ける味方機を見れば士気が上がるのも納得がいくだろう。

「航空支援がある。俺たちは勝てるぞ！！」

「行けーーー、空軍ーーー！」

宣伝上、海軍航空隊の存在も極秘であり、上空を飛行する編隊は空軍の航空支援だと兵は思つた。

「ドイツの戦闘機だとーーー！」

攻撃に向かつていたイギリス空軍はドイツ空軍（実際は海軍）の襲撃に驚いた。

「くつそ……、散開して各自で目標に向かえ……」

スピット・ファイアは上昇して迎撃態勢を取る。ブレニム双発爆撃機とソードフィッシュ艦上雷撃機は散開してドイツ艦隊を目指す。

「喰らえ……」

しかし、数ではドイツの方が勝るため、各個に捕捉されることは撃墜されていく。エーベルトが艦上戦闘機の性能をスピット・ファイアに対抗できるように設計されている為、スピット・ファイアにも善戦中だった。

「何だ、この複葉機……落ちない。」

ソードフィッシュの撃墜には苦労を強いられる。布張りの主翼は銃弾を貫通してしまい、思つ様な効果が得られない。

「複葉機のくせに、生意氣だ……」

しかし、機体にはエンジンなどもあって完全な布張りにすることは出来ない。エンジンには簡単に被弾し、火を噴いて墜落していく。

「30mm機関砲の喰らいやがれ……」

Bf116には60発と言つ少数だが、30ミリ機関砲を1門だけ有している。この時代では破格の威力を持つ航空機関砲だった。

瞬く間にスピット・ファイアは火を噴き、墜落していく。

「俺たちの仕事は終わりだ。後は、艦隊に任せろ。」

上昇し、編隊を組み直して帰還を開始する。

「撃て！－撃て！－！」

数が減つた攻撃隊を、射程に収めた艦隊が攻撃を開始する。

「空軍が数を減らしてくれた！－残りを叩き落せ！－！」

攻撃に来れたのはソードフィッシュ僅か6機。他は全て喰われた。

「敵、2機！－低空に侵入。」

雷撃態勢に入るソードフィッシュを機銃と高角砲がより一層、攻撃を加える。

「駄目だ、落ちない！－！」

布張りのお陰で生存性は非常に高いソードフィッシュは距離を詰めに来る。記録では、175箇所も被弾したにも関わらずに帰還した例が残つてゐるし、未確認だが200か所以上も被弾したのに帰還したパイロットも居たそうだ。その生存性は、伊達では無い。

「敵、魚雷投下！－！」

ソードフィッシュから2本の魚雷が投下される。

「通過時を狙え、高角砲用意！－！」

艦は取り舵を取り、艦が左に旋回していく。

「魚雷、距離100…。」

「回避できるか…?」

「ビスマルクの機動力なら可能です。」

航海参謀の言つとおり、魚雷は2本とも間一髪で回避できた。

「まだまだ、来ます。」

再び、今度は一斉に4機が降下してくれる。

「あれでは、当たるな。」

艦長が、さう考えたその時。2機が火を噴いて水没する。

「な、何が起つた…?」

「艦長、上空に戦闘機です。」

「間に合つたな。」

「はい。」

2機編隊、機体の片方は黒いチューーリップの塗装。

「ヒーリヒさんも突然駆けつけるなんて言わなかつたら、どうなつ

ていたか。」

「ナヒヽヽヽヽ。」

まだ、史実では性能を覚醒しきっていない時期だが、エーベルトの歴史改変劇はここまで及んでいた。ドイツ空軍、世界一の撃墜王『エーリヒ・ハルトマン』がビスマルク上空に翻覆付けた。

「機長、あれは？」

先ほど離水していた、Ar 196が敵艦隊らしきものを見つける

「あれは、じゃねえ。敵艦隊だよ。至急、母艦に連絡を入れろ！！」

「了解。」

ライン演習作戦 後編

ビスマルク

「敵は戦艦3を中心とする巡洋艦8、駆逐艦10の編成です。」

通信兵が偵察機からの報告を読み上げる。

「戦艦が3か。こちらは本艦とティルピツ、シャルンホルストとクナイゼナウが居るから、戦艦戦力で後れを取つてはいないな。」

「しかし、ビスマルク級はともかく、シャルンホルスト級の砲撃力では戦艦を沈めるのに威力不足です。」

「分かっている。」この海戦が終了後に38?砲を装備する予定だ。それまでの辛抱。」

ライン演習作戦完遂後に、シャルンホルスト級は本来の予定通りに38?連装砲を搭載する工事が待つていて。既に、主砲塔は完成しております、28?砲を撤去してそれを装備するだけと言う簡単な工事の為、それほどドック入りもしない。

「それでは、最大戦速で向かおうではないか。」

ビスマルク以下、全艦最大戦速で敵艦隊を目指して航行を開始する。

ゲルマン

「正直、もう一隻の同型艦が居れば砲戦を挑んだのだが。」

もう一隻の同型艦、ヴィルヘルムはあと数週間で就役できるのだが、それは最初から80?連装砲を装備しているため、本来の計画通りで就役する初めての同型艦となる。就役後、他の2隻もドック入りをして80?連装砲を装備される予定である。

「アーリアヒゲルビル、アイスナーとバッハより、攻撃隊の発艦用意完了との事。」

無線を傍受し、正確な位置を掴んだ北方艦隊は攻撃隊の用意を終え、出撃させた。

「いいか、我々の任務は戦艦部隊よりも先に敵に損傷を与える事だ。但し、あくまでも損傷を与えるだけと言う事を忘れてはならんぞ。」

まだ、航空機で敵艦艇を沈めるのは早すぎる。史実よりも早く、航空主兵時代の到来を免れなくなってしまう。それでは、せっかく建造したゲルマン級戦艦の活躍の場が無くなってしまうのだ。

「敵は艦隊の上空に本土より飛来したスピットで守らせている。戦闘機隊は上空の制空確保、艦攻爆隊は敵艦艇へ攻撃せよ。」

Bf110は上昇し、スピットに狙いを定める。シュトゥーカ改造の艦爆と新鋭雷撃機のJu95『ライガー』が艦艇に狙いを定めた。

「スピットと遭つ合ひの時は側面から狙つみに心掛けれ。」

後部では防弾装置で搭乗員の命が一番守り難い。だから、側面から狙つよつに訓練されてこる。

「喰らえ！」

側面からすれ違こざまに一機を撃墜し、戦果を収めたBf110はそのまま上昇して別の敵に狙いを定める。

「目標、前方の戦艦！」

フッドを捉えた」コロナは魚雷を投下する。その魚雷は、面舵を切つて回避されたが、

「投下！」

別の機体から投下された魚雷がフッドの左舷に命中。

フッテ

「被害を報告しきーー！」

艦長は慌てて被害集計を行つ。

「左舷に魚雷命中。浸水し、速力が低下するも、戦闘に支障なし。」

「危ない！！」

ジョークがすれ違いやまに艦橋に機銃弾を撃ち込んできた。その中の一発が、先ほど報告していた兵の頭部に命中し、死亡する。

「艦長、艦橋の窓ガラスが割れ、敵が狙い撃ちしてきます。」

「至急、艦橋から退避しろ。夜戦艦橋で指揮を執る。」

その時、左舷に再び魚雷が命中した。

「そろそろだな。」

待つてましたとばかりに、上空から急降下を掛けるシコトウーカは被雷したフッドに爆弾を投下した。

「流石に、250？では効果が薄いな。」

まだ、本来の目的である800？まで爆弾が搭載できず、艦船攻撃としては非力に近い250？の爆弾を抱えて殺到していた。

「戦艦に効果が薄い。駆逐艦や巡洋艦攻撃に変更する。」

艦爆隊は目標を駆逐艦や巡洋艦に変え、攻撃を続けた。

ビスマルク

「敵が盛んに無線交信を行つております。」

「馬鹿だな。それでは、自分たちの位置を知らせてこようが何うなものではないか。」

「いえ、既に攻撃を受けている模様です。」

「何だと!?」

自分たちより遥かの海域に進出している味方艦隊はいない筈だった。

「空軍か?」

「航空攻撃を受けていると叫んでいるから、恐るべしは。」

「ゲーリングめ。我々の手柄を横取りする積りか。」

「しかし、戦艦は沈んでおりません。それを沈めれば、巡洋艦や駆逐艦など、空軍に渡してやればいいでしょ。」

「やはり、航空機で戦艦は沈められんか。」

まだ、この時代では戦艦が世界の海を支配していると思われている。航空機が世界の海を支配すると考えているのは、航空隊と一部の海軍関係者のみである。

「捉えたぞ。」

航空攻撃が終わり、見るも無残な状態なイギリス海軍をまだ歴史の浅いドイツ海軍が捉えた。

「前方艦、フツドより砲撃開始。」

「何を馬鹿を遣つている。走りながら砲撃とは。それに、前を向いておる。フツドめ、焦りすぎて東郷の教えを忘れたのか？そんな奴らに、世界の海を支配する権利は無い。面舵一杯！」

東郷平八郎。日露戦争の英雄で、日本海海戦で様々な要因が重なつて完勝した戦いを指揮、世界でも初の試みである斉射を採用した人物として知られる。有名な一斉大回頭の通称『東郷ターン』は有名である。

「各艦艇、面舵一杯。左舷砲戦用意！！」

右に舵を切り、戦艦群が一斉に砲塔を左に向ける。世界で再び、日露戦争の日本海海戦を再現しようとしているのだ。

「イギリスが初めは信じなかつた日本海海戦の勝利、今度も貴様らは我々が勝つことを信じないだろつ。」

砲塔が敵艦隊を捉えた。

「各艦、一斉砲撃はじめ！！」

全ての戦艦の主砲が一斉に放たれ、敵艦艇に向かつて飛翔した。

「目標に命中3、各艦艇の連絡密にして、互いの主砲調整に心掛けよ！！」

各艦が連絡を取り合い、主砲角度を調整していく日本海海戦での戦法を採用し、攻撃を続ける。一方、イギリス海軍は先ほどの航空攻撃を受けて士気が下がっており、士気の低下は命中精度低下にも繋がる。そして、それは焦りにも繋がるのだ。

「大陸より、何かが向かってきます！－」

「何！？」

フッドが迷走し始めたその時、ドイツ本土から何かが向かってきた。後部にはジェット噴流、弾頭には炸薬らしき物。

「あれは！？」

「總員、何かに？まれ！－」

そのロケットはドイツ艦隊を通り越し、迷走を始めたフッドに5本が命中して沈没した。

「一体、何だつたんだ？」

これを見たイギリス海軍は直ちに撤退。ドイツ艦隊も、暫くはフッドを呆然と眺めていたが、敵が居なくなつたために撤退した。かくして、北海とドーバー海峡の制海権を賭けた戦いは、フッドの沈没で幕を閉じ、ドイツが制海権を獲得した。

「実験は成功ですね。」

大型のトラックが停車している近くに、エーベルトは居た。

「はい。」

「ワーグナー博士、これであなたの開発した『エアロー』は採用になります。」

世界初の対艦ミサイル『エアロー』は現在で言ひ走弾道ミサイル発射基となるトラックから放たれ、遙か遠方のフッドに命中させたのだ。

「はい。航続距離はここからイギリス本土までも十分に射程圏内に収めています。『エミサイルもあと数か月で試作一号機が発射される予定です。」

ロケット技術に道を見出したドイツ科学者は早期の研究開発とエーベルトの創設した兵器産業省の援助を受けてロケット、そしてミサイル開発を進めていた。そして、それが史実よりも早いロケットやミサイルの誕生を生み出したのだ。

「では、私はフランス侵攻を実行せねばならないので。」

既に、エーベルト指揮の第28独立機甲師団はフランスを目指して移動を開始していた。エーベルトはエアローの実験を見るためにドイツへと残っていたのだ。

「1か月もかかりませんよ。フランスを落とすなんて。」

「では、それまでに?~N//サイルを完成させてしまうますね。」

「実験が楽しみです。」

キューベルワーゲンは走りだし、第28独立機甲師団を追いかけた。

フランス戦 1

ランス

「揃つたか。」

フランス東部は完全に占領され、パリを落とせばフランスは降伏しか道は残されていない。

「第28独立機甲師団の初陣、フランスのパリを落とす事となつた。」

エーベルトはただそれだけを言った。実際、それしか言う事は無かつた。軍事訓練を受けた兵にとって、戦う以外に生きる道が無いからだ。

「フランス政府に降伏勧告の文章を軍師が届けたそうですが、良い回答は得られませんでした。」

ディエ工中尉が報告する。

「落とすしかない。パリを陥落させ、降伏文書を受け入れてもうしきないな。」

全員が百も承知だった。

「乗車。急げ！」

エーベルトが指示を出し、自ら乗車するレオパルド2へ乗り込む。

乗り心地は、前作のレオパルドと比べ物にならないほど良い。センサー類で狭い感じはするが、逆に現代になれた工ーベルトはこっちの方が落ち着く。

「失礼します。」

そう言って砲手席に座った少女。この戦車の砲手である『エラ・ファウザー』独立軍少尉候補生。

「ああ。」

この少女、エーベルトには何か引っかかる部分があった。軍人であることに変わりはないが、おかしいと思える事がある。そこへ、

『大将、聞こえますか?』

無線機を介してこの戦車の無線手、『ハルトムート・フォン・フッケンパイン』独立軍少尉候補生の声が聞こえてきた。ユンカー出身の貴族家系の息子。将来を約束されていたが、決められた人生を歩む気はないと言う事と、幼いころに見たヒトラーに感銘を受けた為、独立幼年学校に入学。首席卒業を果たした。

「ああ。感度良好。センサーの異常はないな?。」

『はい。』

この戦車の装備するセンサーの殆どが無線手である彼によつて操作される。この戦車で、一番の重労働が無線手だろう。前方機銃から、無線操作、更にセンサーの操作を行わねばならないのだから。

操縦手は操縦に専念する。デイエ中尉が担当する事となる。砲手は自働装填装置による主砲弾装填と射撃、主砲同軸機銃を操作する。戦車長であるエーベルト大将は部隊の指揮と本車の指揮、砲塔上部機銃と砲塔後部機銃を操作せねばならなかつた。

他にも、臨時の際に一名が搭乗するスペースがある。基本は衛生兵が乗るが、今回は誰も乗つていない。

「デイエ、エンジン始動。」

「了解。」

エンジンを掛ける。マイバッハガスタービン式エンジンが低い唸りを上げ、暫く車内が振動した後、その振動が治まつたところで、

「パンツァー・フォー
戦車前進。」

第28独立機甲師団はパリを目指して移動を開始する。随伴の歩兵部隊は再編された6000名程度の歩兵で構成されている。組織だった戦車隊が失われているフランス軍相手には十分だつた。

「砲兵隊も随伴している。今回はゆっくり行くぞ。」

砲兵隊も随伴するため、進軍スピードはエーベルトにしては珍しくゆっくりだつた。アルデンヌを僅か2日で突破した進軍では落伍する戦車が増えるために今回はやめた。

「ある程度整備されているから、進軍はスムーズだな。」

整備された道路網を使ってパリを目指す。

ケールシュタインハウス

「總統、全軍がフランス陥落を目指し、移動を開始しました。」

武装親衛隊の将校がヒトラーに報告する。

「そうか。ヒムラー長官、親衛隊を陥落後にフランスに入れ、ユダヤ人を徹底的に迫害せろ。」

「了解しました。總統。」

「ふふふ、フランス陥落後、次の目標はイギリスだ。余の目指す、ヨーロッパ帝国再建にはイギリスの屈服が必須なのだ。」

ヒトラーは自らの世界観から、歐州の全土統一を目指している。そして、その波は同盟国である日本以外のすべての国々を奴隸化させることすらも躊躇わなかつた。イタリアも、ムッソリーニの手腕は勝っているが、戦争指導などでは三流以下と称し、何時かはイタリアも侵略する計画を進めていた。

「全世界が余の前にひれ伏し、余は歴史上初めて世界を統一した男となるのだ。」

ヒトラーはあるで、狂気に憑りつかれたかのような発言までし始めた。一体、彼が目指していたのは芸術家の筈。なのに、なぜ彼は政治家を志し、狂気なまでの行動をするようになったのか？崩壊する世界に、希望があるとすれば、それは何なのか？。答えは今後、

明らかになつていくだらう。

フランス戦 2

進軍を続けるドイツ軍を阻める存在は無かつた。

「戦車隊、敵前を突破する。」

戦車は一か所を集中火力で突破し、前線を総崩れさせる。そして、崩れた所から歩兵部隊が各個制圧。これが、ドイツ電撃戦の特徴の一つ。

「エーベルト大将、前線を突破した戦車隊が首都を目指して進軍中ですが。」

「分かつてゐる。一番乗りは第28独立機甲師団だ。」

首都へ一番乗りすると云つ名譽をエーベルトは逃したくなかった。新たに創設された部隊の一番乗りが兵らの士気に吉と出るか凶と出るかは個人にもよるが、それでも一番乗りの名譽はどれにも勝る最高の名譽である。

「レオパルド2と言う最新型戦車を受領したんだ。一番乗りすれば、總統のお目も高いだろ？」

A4号線を一直線に突き進み、パリが見え始めた。

「前方にフランス軍戦車8、歩兵数名を確認。」

前方カメラが歩兵とB1戦車、S35戦車が居る。

「全く、フランス軍の無能な上層部共め。戦車の分散配置が如何に愚策か教えてやる。」

エーベルトは時代が変わり始めているのに気付かないフランス軍上層部の無能っぷりに腹が立つ。

「恨むなよ。恨むんなら、無能な上層部を恨め。」

戦車砲弾が装填され、目標へ向ける。

「戦車横隊、一斉攻撃。」

戦車が横一列に並び、一斉に140mm砲弾を敵陣地に向けて放つた。

「凄いですね。」

砲手のエラが照準儀に映るフランス軍陣地の悲惨さを見る。

「エラ少尉候補生。これがレオパルド2なのだ。この戦車はこの時代ではどの戦車よりも高性能で、どんな状況下でも確実に任務を終すために製造されている。」

（まあ、尤も。それは最悪、我々を犠牲にしてまで、味方の後退を支援するためなのだが。）

エーベルトはそう思う。大勢の味方の為なら自分は死ねるのか？それが、彼には疑問を抱かせる。

「大将殿は戦車戦を熟知しているようですが、その年で大将になれ

るんです。相當な実力だと思つていました、本当だつたんですね。

「

「そうでもない。」

そう言って、エーベルトは横にあるテレビに、前方カメラの映像を映した。

「戦車は全滅した。歩兵は後続部隊に任せろ。」

「了解しました。前進します。」

ディエがアクセルを踏み込み、進撃を開始する。歩兵は機関銃などを放つてきたりが、そんな物、戦車には無力。逆に、前方機銃と戦車同軸機銃で蹴散らされた。

ドイツ軍補給所

「戦車隊の燃料消費は非常に高いです。今田だけで、訓練時の2か月分を使用してしまいました。」

「仕方が無からう。戦時は平時と違う。常に激しい行動が必要になります。燃料消費量なんか、半端じゃない。」

補給将校とエーベルトは補給基地で言いあう。

「それは、分かります。しかし、大将殿。この燃料消費量では、予定の3倍は軽く超えます。」

「

「だったら、空軍に敵を蹴散らさせろーー！。戦闘があるから燃料消費量が激しいんだよ。何のための電撃戦だーー！」

思わず、エーベルトは強く言つ。

「一応、今日は天候が今一だったので、空軍は飛べませんでした。しかし、明日は快晴。絶好の飛行日和です。」

「だったら、空軍に叩かせる。燃料にはあまり余裕がないのだ。今、帝国の戦車用燃料の残量は全機甲師団が一斉に動いて3日しか持たない。これでは、この作戦に参加している全8個師団では1~2か月だ。」

「明日は、空軍が動きます。我々は、明日にはパリへ入城。降伏勧告を行います。」

「パリは、できれば無血入城が良い。あの歴史ある都市で戦闘なんか、真っ平御免だ。」

「補給将校である、私に言われても。」

米戦艦 ウエストバージニア

「同志、チャーチル。ドイツ軍はパリ以前まで迫つてゐるやうじやないかね。」

ルーズベルトはチャーチルの顔を見て言つ。

「はい。フランスは明日、降伏を決定しました。ダンケルクからの撤退は失敗し、1万人程度しか救うこと出来ませんでした。」

「ド・ゴール将軍が救われただけでも、感謝せねばならないな。」

「はい。」

シャルル・ド・ゴール将軍は史実とは違い、ダンケルク撤退戦で輸送艦に乗艦するも、10ほど渡つたところでリポートの攻撃を受けて乗艦が沈没。漁船に拾われ、命からがらイギリスへ到着した。撤退場所でシャルンホルストなどの高速水上艦艇が奇襲し、振り切ったところで航空機が強襲。離れた所でリポートの奇襲と、幾多もの攻撃に耐えられた艦はごく僅かであった。

「我々も、出来る限りの援助はします。しかし、国内の厭戦気分と孤立主義のお陰で開戦できないのです。上手く、日本に戦端を開かせねばなりません。」

ルーズベルトは早く戦争が遣りたかった。そうしなければ、国内の不況が終わらない。ニューディール政策は一部が高裁で違憲と判決され、失業者もあまり変わらなかつた。なので、景気回復には戦争以外の道は無かつた。

「禁油措置をすれば、早いのですが。」

「しかし、ドイツは三国同盟を一時的に凍結すると言つてきた。そんな国に禁油措置をすれば、国内の親日派が黙つていません。」

ルーズベルトは杉原千畝の行つてゐる日本へのピザのお陰で国内の

ユダヤ人や日系人などが親日感情になつてゐるのに、この状況で禁油措置など行つたら、支持率は相当痛手を被る。

「最悪は、どんな手を使ってでも戦端を開かせねばならない。」

ルーズベルトはもはや、どんな手を使ってでも日本がアメリカに攻撃させねばならない。

「同志、ルーズベルト。我々、イギリスは今やナイフの上に立つているようなものだ。ヒトラー率いるナチス・ドイツに勝つには、貴国の援助が何よりも必要なのです。いや、援助ではなく、戦争です。」

「同志、チャーチル。我々は、戦争をするのではなく、作るのですよ。正直、ヒトラーには感謝しなくてはなりません。我々の計画に自らが乗ってくれたのですから。」

「そうでしたな。」

一人はがつちりと握手を交わした。しかし、この様子を一隻の潜水艦が見ており、水中聴音機で二人の会話を完全に聞き取り、しかも、録音していた。

「やはり、戦争を望んだのはアメリカとイギリスか。」

ドイツのuboートの一隻がこの会話を記録していた。

「大西洋上にアメリカの戦艦が居ると思つて近づいてみれば、どんな会談をしてやがる。」

艦長はアメリカが宣戦布告していれば、容赦なく魚雷全門を自艦の損害関係なく至近距離からぶち込んでやりたかった。

「しかし、これでアメリカとイギリスが戦争を望んでいたって証拠になりますよ。」

航海長が艦長のもとに来て言つ。

「そうだな。今日のこの事はノルウェー潜水艦隊司令部へ報告するぞ。」

ノルウェー政府降伏後に作られた潜水艦隊司令部に今日のこの会談の内容が完全に報告された。これは、ドイツにとって、最高の贈り物とも言えた。

フランス戦 3

パリ市内

結局、エーベルトの思惑は外れてしまった。パリには戦闘状態と言う状況で突入してしまった。空軍は朝早くから空爆でフランスの燃料集積基地を破壊し続けている。

「防空壕がある、気を付けろ。」

パリ市内の至る所に防空壕や塹壕が設置されており、戦車はそれを踏み越えて進撃する。

「3方向から突入しており、壮絶な市街戦を繰り広げているとの事。」

ハルトムート少尉候補生が伝える。

「分かった。凱旋門付近に、敵が集結中と伝える。」

第28独立機甲師団はレオパルド?、ティーガー?、パンター?とドイツが装備する戦車の中で最新式戦車だけを運用する、世界でも類を見ない機甲師団であった。特に少年、少女で編成された部隊では異例中の異例である。

「ルノーB1戦車が見受けられるな。S335騎兵戦車やFCM36軽戦車も見える。」

車外カメラを使って外の様子を見たエーベルトは

「弾種、徹甲。」

「了解。」

ファウザー少尉候補生は答え、自動装填装置のスイッチを押して徹甲弾を装填する。

「撃て！」

発射された徹甲弾はルノーB1の前面装甲を軽々貫通した。高々、60mm程度しか装備されていないB1が耐えると言つ方が無茶である。

「撃て！」

続いて後続部隊も砲撃。パリに主力を集め、地方が手薄。その隙に攻め込んだ部隊が居るほどだ。エーベルトはラジオのスイッチを入れる。

（パリは燃えているかが流れれば、最高なんだがな。）

ラジオは戦意高揚を呼びかける放送しかしていない。それに、エーベルト「希望の曲はまだ存在しない。」

「ラジオの出力をドイツに合わせてください。」

ディエ工が言つてきたので、エーベルトは出力をドイツ国営放送に繋ぐ。

「繋いだが、こっちも戦意高揚の軍歌しか流していないぞ。」

ときどき、戦況報告が公表されたりするが、その殆どが過大戦果である。

「戦車中隊に分かれて戦闘しろ。固まっていたら的だ。」

そう言つて、エーベルトは戦車中隊規模15両ほどに分かれて戦闘を開始する。

「歩兵の構築した陣地ですね。戦車もS35が居ります。」

S35が2両駐留する歩兵の機銃陣地を見つける。

「パンター？が攻撃要請です。」

「本車と共に攻撃だと伝える。」

連絡し、発射体制を整える。

「撃て！」

準備出来次第、直ぐに行動を起こした。弾薬を集積していたのか、小規模な爆発を起こして陣地が破壊された。

「凱旋門を占領したぞ。」

凱旋門の周辺を占領完了。これが確認され、パリ上空に輸送機が大量に到着し、空挺部隊と補給物資を投下された。中でも、面倒なのが空挺部隊の存在である。彼らは絶妙なところを狙つて降下し、数

少ない戦力で占領してしまつ。

「正直、あれをもつと訓練して最終的には完璧に熟さなくてはならない。」

「エーベルト大将、フランスの降伏は目前。貴官隊には救援の戦車数両を受領させる。」

更に、ドイツは占領されている地域の列車網を繋げたりと勝手な事をしてヨーロッパ全土に列車が広がって行つた。そのお陰で、列車砲を始め、火砲から武器や戦車を迅速に陸揚げ可能である。

「フランスに、戦車はもう無い。」

エーベルトは、そう確信した。軍師によつて幾度となくフランス政府と交渉、1週間が過ぎ、反乱兵力が少しづつ弱め、フランスはついに降伏した。

長きにわたる損害は激しく、特に歩兵の損害はドイツとしては大きかつた。しかし、これから始まるうどしている空の戦いに陸は関係ない。その間に兵力を元に戻すように薦められていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3528v/>

異説、ドイツ栄光の階段

2011年10月6日16時10分発行